

2013年度 第4回 全体研究会 近代日本仏教研究（第1回）

- 報告題目：救済システムとしての「死者供養」
- 開催日時：2013年6月29日（土）14：00～16：00
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
- 報告者：池上良正（駒澤大学総合教育研究部教授）
- ファシリテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授、BARCセンター長）
- コメンテーター：碧海寿広（BARC・PD 研究員）
- 参加者：21人

【報告のポイント】

池上良正氏は、仏教に基づく「死者供養」を、東アジアで形成され民衆層に普及したユニークで動的なひとつの「救済システム」として捉え、その歴史的な展開と現状、今後の可能性について、宗教学の立場から論じた。

【報告の概要】

池上氏は、はじめに「死者供養」には大きく分けて二つの役割があることを指摘した。すなわち、(A) 親孝行や先祖の孝養、(B) 何らかの未練や怨念を残した死者（苦しむ死者）たちの救済、の二つである。この二面性が動的に融合し、東アジアで広く受容されてきた。「死者供養」の基本型が形成されたのは中国大陸であり、そこで中心におかれたのは仏教的な「追善回向」であった。

「追善回向」の考え方は初期仏教でも説かれていた痕跡があり、また今日の上座仏教圏でも広く認められるが、しかし中国では在来の宗教や思想と結びつくことで、(A) (B) の二面性をもった洗練された様式が発達した。(A) (B) が融合した特性は、盂蘭盆の行事や施餓鬼系の儀礼（水陸会など）に特徴的にみられる。日本では、近世の寺檀制度の確立によって、仏教寺院の死者供養は(A) の「先祖供養」の側面に特化していくが、東アジアの「死者供養」をひとつの「救済システム」として総体的に見るならば、むしろ(B) の側面と(A) との結びつきこそが、システムが民衆層に定着するにあたり大きな原動力になったことが注目される。

仏教やキリスト教などの世界宗教は、生者と死者の関係に決定的な変革を引き起こし、二つの異なる救済システムの類型を創造した。すなわち、①死者および死そのものを、絶対的なものに委ねることによって、生者が救いを得る、②絶対的なものを仲介者としながらも、生者が死者を救うことによって自らの救いも得る、の二者である。このうち東アジアで発展した「死者供養」というのは、②のタイプの救済システムが極度に洗練されたものとみなすことができる。

救済システムとしての「死者供養」には、比較宗教学の観点からみて興味深い様々な特性があり、特に三つの大きなテーマが注目される。第一は、「葬式仏教」といわれるように日本において仏教と死者祭祀が緊密に結びついている現状を、日本の「固有信仰」のような歴史的に証明不可能な伝統性によって解釈するのではなく、東アジア全体に深く根を張っていった救済システムの、一つのバリエーションとして位置づけるということである。そうした視座からは、中国社会、朝鮮半島、日本列島、琉球諸島と、「死者供養」が伝播した地域それぞれの時代ごとの状況のもとで、このシステムがいかにか様式化され展開していったのかを具体的資料に則して分析していくことが、今後の重要な課題となってくる。

第二に、施餓鬼という儀礼の重要性についてである。施餓鬼は、浮かばれない非業の死者への施しが大きな功德となり、それが施主となった本人やその家族の平安はもとより、身内の親族や先祖の来世での平安にも役立つ、という考え方のもとに普及した仏教儀礼である。これは (B) を中心としながら (A) の側面を動的に包み込むことによって発展したという点で、まさに「死者供養」の代表的な儀礼である。宋代以降、東アジアに広く伝播したこの儀礼は、今日に至るまできわめて重要な役割を保持し続けている。

第三に、「死者供養」が死者の霊魂や他界の有無といった「存在」よりも、「関係性」に力点をおいている、という特徴についてである。「死者供養」とは、生者が死者との関係性を再確認することでその関係性を存続させ、あるいは新たな関係性を気づかせ、場合によってはそれを良い方向に変えていこうとする積極的な実践である。「供養する」という実践がある限り、死者は消えても関係性は消えず、つまりは死者との「縁」が消えることはないし、新たな「縁」が結ばれることさえある。

以上のように、池上氏は「死者供養」を東アジアにおいて展開された独自の救済システムとしてみる視点から、このシステムの歴史的な意義と、今後の研究的・実践的な可能性の広がりを説得的に示した。

## 【議論の概要】

碧海氏は、明治以降の近代化のなかで日本仏教が（A）の先祖の孝養という側面により特化していった理由はなぜなのかの説明を求め、また、東アジアを焦点化した「死者供養」論が日本「固有信仰」論の相対化につながることは確かだが、他方で東アジアの特殊論に陥る危険性はないかと問うた。これに対して池上氏は、近代において日本仏教が（A）に傾斜していったのは、家族国家観の影響が大きく、伝統教団も先祖を大事にするという国家の徳目に迎合していったことが大きいと述べた。また、「死者供養」論は確かに東アジア特殊論になる危険性はあるが、しかし「死者供養」の二面性について考える際、「孝」を中核とする中国文明の存在は大きく、特殊論に陥らないよう注意しつつも東アジアから考えていくことが大事であるとした。

佐藤智水氏は、「死者供養」の基礎になる人間どうしの関係性自体が、現代では弱体化しているのではないかとコメントした。これに応じて池上氏は、自分の力で結んでいく関係性である「絆」と、受動的に結ばれる関係性である「縁」の違いを説明しつつ、「縁」を感じつつ生きることの価値は現在もお見失われていないのではないかと述べた。入澤崇氏は、生者と死者を過度に分けて考える発想は、現代に特有のものではないかと問うた。これに対して池上氏は、近代以降の西洋社会のように生者と死者を隔離し、後者をタブー視するような態度は日本にはあまりなく、ただ、死者との関係性をうまく結ぶための様式や作法が衰退しつつあるのが、現在の問題含みの状況なのではないかと応えた。

